
真剣で私に願いなさい - 八百万の想い -

六道真輝

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

真剣で私に願いなさい 八百万の想い

【Nコード】

N6249Y

【作者名】

六道真輝

【あらすじ】

たくさんの兄弟姉妹と父と山で暮らしていた少年はある日全て失った。

火の記憶。 死の気配。

107の骸の丘に誰かが立っている。

それから数年後。

死んだと思われた彼は川神市にやってきた。

彼女——川神百代に会う為に。

彼の名は天憧百八。

曰く付きの名を持つ、百代に似た名の白い少年。

——あ、別にシリウスではないのだよ。

人物紹介（前書き）

ネタバレではない——そう信じているから。

人物紹介

てんどうももや
天憧百八

身長――175センチ

血液型――？

誕生日――10月8日

一人称――僕／■ ■

武器――肉体

職業――学生・川神学院2-S

所在――川神院の近くにある安物マンション

好きな食べ物――たくさん

好きな食べ物――特になし

趣味――特になし

特技――特になし

大切なもの――自分・百代

苦手なもの――自分・百代

尊敬する人――今は亡き107人の兄弟姉妹

髪は脱色してしまったので白。元は黒。

武芸百般を修めた人。

勿論武芸だけでなく、家事においてもあらゆる点でこなせる。

その能力を誇る事も奢る事もなく、総じて人当たりが良い人物が、すぐ騙される。

性格は小雪に近く、のほほんとしていて来る者拒まず、去る者追わずがスタンス。

どんな理不尽も笑って流して受け入れられる。

ただ日々を漫然と生き、人生に対して夢も目標も？現状は？ない。唯一つだけあるが、それは夢や目標というよりも彼自身の胸に秘

めた誓いのようなもの。

百代に対して並々ならぬ関心を抱いているが、それは恋心とは少し違う。

なお、幼い頃に九鬼家の方々との面識がある。随分と幼い頃にだが。

てんどうじゅ
天憧十樹

かつて最も鉄心が信用した高弟にして、後の日本の聖人。非業の死を遂げた人物。

その観察眼から天眼と呼ばれ、九鬼家現当主である九鬼帝に頼まれて多くの人材を掘り出した経験も少なからずあった。上下関係はもちろんなあったが、本人達にとっては友人のような関係だったらしい。

九鬼を止めたければ天眼を止めると言われた程で、彼の九鬼での発言力は相当なものだった。彼の死に多くの者が嘆いたが、同時に安堵した者も多いという。

往年43歳。

人物紹介（後書き）

まあ、何がしたいのかと言うと。
マジこいSに対するフラグですよ、旦那。

0・・・天道（前書き）

少しだけ変えた。既読なら読む必要はあんまりないです。

0・・・天道

かつて。

川神院には三人の師範代候補がいた。

一人はルー・イー。

後に師範代となる武の正道を重んじる努力家にして凡夫の頂き。

川神院を正しく体現する一つの理想形。

一人は釈迦堂形部。しゃかだんがたけぶ

三人の中でも最も強く、また獣のような男。

後に師範代へと登るが、精神が未熟とされ川神院から破門された
武術家にして野獣。

そして。

最後の一人。

てんどうじゅ
天憧十樹。

ルーのような努力家でもなく、また釈迦堂のような天性の武人でもないこの男は、誰よりも人を見る目に長けていた。

一目でその者に才能があるか否かを見極め、果てはその先の展望さえ見通せるほどの観察眼は一種の未来視、天眼とまで言われた奇才。

また三人の中で最も長く川神院で励み、長たる鉄心を支え続けた重鎮といえるべき人物。

しかし彼は川神院始まって以来の神童、川神百代の誕生と共に川神院を去った。

多くの人物に何故と問われても、決して答えず、惜しまれながら見送られた。

以降、彼は世界中を旅しながら戦災孤児や浮浪児を引き取り続け、日本の山奥で暮らしながら子供達を育て始めた。

その数、なんと百八。

狂っているとも思えるその数は、けれど彼の莫大の財力によって克服されたが、問題はなぜそれほどの子供を引き取り育てるのか。訪れた鉄心に問われ、彼は嬉しそうに、けれどこそばゆそうにこう返した。

？これが私の天道なのです。切磋琢磨して成長する子供を見ているのが、私の楽しみなのです？

鉄心は彼の言葉に喜び、ルーもまた彼の言葉と意志を讃えた。ただ釈迦堂のみが、それに喜ぶ事も讃えることもなかった。

何も言わず、ただ薄気味悪いモノを見るような目で談笑し合う三人を——正確には天憧十樹を見ていた。

そして六年後。

天憧十樹と、彼が救い育てた子供達は山火事で、あっけなくこの世を去った。

一人の男の子を残して。

生き残った子供の名は、天憧百八。

まるで悪い皮肉のような名を持つ少年は、日本の聖人とまで言われた天憧十樹の実子である。

あの事故から更に数年後。

彼の少年が川神学園に転入する事で物語は動き出す。

一人の男の狂った願いに歪められて。

0・・・天道（後書き）

ノリで書いているから文体崩れてるかも。
感想なんでもいいからちょうだい、っと。

1・・・挨拶

「ここが川神院かあ」

手には綺麗に梱包された白い包みを持つ少年が、巨大な寺院の前に立っていた。

この寺院の名は川神院。

世界最高峰の武の鍛錬場で、恐らく日本最大規模の武術館には、今日も今日とて人が多く出入りする。

門の前に立っている少年は色んな意味で目立っていた。十中八九、誰もが同じ感想を抱くだろう。

白い。

真っ白だ。

腰まで伸ばした髪は脱色したかのように白。それ故に一見では年齢不詳だが、顔をよく見ればまだ十代後半の若者だと分かる。

そして顔をよく見ればまた驚くだろう。白磁のように白い肌に左目には白い眼帯が巻かれている。

更に格好も中々奇抜だ。

身に着る衣服もまた白の流し着に白い帯。

白い絵の具で描いたような人物像は、景観華やかな周囲にはまるで穴が開いたようにも映るだろう。

当然、そんな姿が門の前で止まっていれば――

「君、何か用かな？」

川神院の境内から道着を着た男が声を掛けて来るのも当然だろう。大方出入りしていた者から変な白いのがある、とでも言われて来

たのか。少年を呼びつけた男も、その姿を見て至極納得した。

ああ、確かに白いなこの子、と。

しかし声を掛けた男に、白い少年は反応しない。巨大な門を仰いで突っ立っている。

首、疲れないのだろうか。

「……おい？」

男が再度声をかけるが、反応なし。三度四度と声を掛けても全く反応がないので、とんとんと肩を叩くとようやく反応を見せて、

「あ、はい。そうですね。今晩は焼き魚がいいと思います」

たどたどしく、抑制のない口調。まるで喋る事に慣れていない様子で、全く関連性などないことを口にした。

「いや別に夕飯の話はしていないのだが……川神院に何か用かい？」

「——？」

「……どうした？」

「——……ああ、貴方は、川神院の人……なんですか？」

「そう名乗ったし、見ての通りなんだが」

確かに男が着ている道着には大きな黒字で『川神』と縫われている。

少年は「本当だ」と呟き、ついでにこりと笑った。
人好きのする、ほがらかな笑みだ。

「天童百八が来ましたと、鉄心の爺様に伝えてもらえますか？」

「茶がうまいのお」

縁側に腰を落ち着け、快晴の空を見上げながら茶を飲む。

うむ、旨い。

これで孫達が仲良くしておれば最高じゃな。

一子はいつまで経ってもめんこい孫じゃが、最近のモモはのお…。

モモは飢えておる。強者に。今はワシがおるから問題ないじゃろうが、流石にもう何十年と生きとりやせんじゃろう。

その時にはモモも、今以上の武人になっておる事は間違いない。ふとそんな重い考えをしている事に気付き、苦笑した。

「せっかくの休みに、ワシはまた面倒事を……」

歳かの。

あの飢えを、武ではなく別の方向で発散させる事は出来ぬじゃろうか……

例えば？

「……………恋とか、の」

……………。

「爺のワシがなに言っちゃてんじゃかな」

少し鳥肌立ったわい。

しかし恋か。

恋をすれば人は変わるとは真実じゃ。

じゃからモモも、恋をすればあの飢えもあるいは……。

「その相手がのぉ、おらのじゃからなあ……」

だから女漁りなどに興じおる。

「誰か良い男はおらんかのぉ」

最有力候補といえば、あの風間ファミリーの連中くらいじゃが。後は……

あやつの子が、生きておれば……あるいは……

「……いかなの、どんどん重くなっていきよるわ」

バリバリ。

醤油せんべいを食べ、熱い茶をすする。いつもはこの時が至福の時間なのじゃが、どうも考えておること故か、旨くないわい。久しぶりに初心に帰って座禅でも組むか。

「む、ルーか？ 随分と急ぎ足じゃな」

こちらに近づいて来る気配を感じ、襖の方を見やる。同時にルーが「学園長！」とやけに切羽詰まった声を上げて入ってきたから驚きじゃわい。

「どうしたルーよ。血相抱えて」

珍しい、ルーがこれほど焦る事など久しく見ておらんな。茶でも飲むかと茶碗を渡そうとして、

「百八が、天憧百八が来ましタ！」

パリンと。

茶碗を落としてしまった。

なに？

天憧百八？

来た？

……………。

「……………！？ なんじゃとッ！？」

そのたった一言に、ワシは思わず立ち上がった。割れた茶など知ったことではない。

さっきまで考えていた事も、軒並み彼方へ消えて行ってしまった。

まさか、本当に？

どうして、何故いまさら？

嘘ではないのか？

聞き間違いでは？

「今、門の前に来ていルと、門下生から」

「通せ！ 今すぐに！」

「はい！」

打てば響くようにルーは踵を返していった。

ワシは暫しその背を追い、ペタンと腰を落としてしまった。

まさか、本当に？

あやつの、子が……………？

「生きて、おったのか……」

白い少年——天童百八は境内に入る許可を得て、案内役の人に腕を引かれて院内を歩いていった。腕を引かれているのは途中——というか何度も稽古をする人を見かけると立ち止ってしまうので、無理矢理引っ張っているのだ。

歩く事十分。

やけに大きい襖を前にして、引いていた腕がようやく離れた。

「この先に師範と師範代がいます」

「師範代は誰？」

「？ ルー・イー師範代ですが？」

なにを言っているんだという目を向けられ、そうですか、と百八は呟いた。

「案内してくれて、ありがとう」

笑って礼をいい、百八はゆっくりと襖を開けた。部屋の中には、二人の人物。

鉄心とルー師範代。

両者の目には、うつすらと涙が浮かんでいる。

部屋に入る前に一礼し、中に入って正座を組む。

「……………」

「……………」

「……………」

沈黙。

三者共に、何を言っているのか分からない。

鉄心は言いたい事、聞きたい事が多すぎて。

ルーもまた同じだが、鉄心より前に問う真似は出来ず。

そして、百八は――

「爺様」

と。

百八は鉄心を呼んだ。呼ばれた鉄心はピクリと眉を揺らし、次いでふるふると震えだした。

「僕の事、覚えて、いますか？」

「……勿論じゃとも」

声も同じく震えていた。涙ぐんでいた。

「一日たりとも、忘れたことなどないわ……ッ」

年がいもなく涙を流し、ぐいと裾で拭う。もらい泣きしたのか、ルーもまた涙を流していた。ボロボロ流していた。

「ルー先生も、お久しぶりです」

「よく、よく生きていてくれた……！」

「師範代、なれたと聞きました。おめでとう、ございます」

「ああ、しかし師範代になれた時よりも、今、君が生きていてくれた事の方が、何倍も嬉しい……！」

それからまた沈黙。しかしその沈黙は冷たいものではなく、それを噛みしめるような温かなものへと変わっていた。

「髪、伸びたの」

「はい」

「飯は、ちゃんと食べておったか」

「たまに抜きますが、おおぬね。きちんと」

「今まで、何処二？」

「……詳しい話は、言えませんが。衣食住には、困りませんでした」
「なぜ、なぜ今まで顔を——連絡をくれなかった……？ あの事故からロクに日も立たずに病院からいなくなったと聞いた時から、ワシはずっとおぬしを探したのじゃぞ」

「……………」

「答えられぬか？」

「療養のために」

「それならば病院に」

「いえ。心を……治したくて」

「……………」

「……………」

その言葉に、鉄心は口を閉じた。
踏み込めない。

あの時、あの場にいなかった者に、口出し出来る事ではない。
これ以上の詰問は、閉じた傷を再び抉るようなものだから。

「これからどうするのじゃ」

だから、かつてではなく、これからの事を問うた。
ここに来たという事は、ここで暮らしたいからだ。鉄心は思っていた。それは勿論ルーもで、だからか、百八は困ったような笑みを

浮かべて首を振った。

「分かりません」

「なに？」

「僕が、ここに來たのは、ただ、挨拶に。生きていると、伝えたくて。それだけです」

「……住まいは、あるのか？」

「……今は、特に」

「ならばここ住め。いや、住んどくれ。遠慮などするな。ワシはお主に……お主たちに、なにもしてやれなかった。ただ、あの焼け野原を見ている事しか出来なかったワシに、報いさせてくれ。でなければ、おぬしの父に天国で逢わす顔がないわ」

「――」

父、天憧十樹。その名を鉄心から聞いて、百八はふと目を閉じた。苦しそうに。しかしそれも一瞬の事で、武道の達人である二人は氣付かなかった。

「でも、お金が――」

「そんなもの氣にするなと言っておる！」

「……。しかし」

「嫌というならそれで構わん。ただ、住いが見つかるまではここに居てくれ、頼む」

「私からも頼むヨ、百八くん」

二人から頭を下げられ、百八は笑った。嬉しそうに、同時に悲しそうに。

「……僕は、いていいんですか？」

「勿論じゃ」

「勿論だヨ」

「……甘えさせて、もらいます」

「うむ、では部屋を用意しよう。積もる話はその後じゃ。ルー」

「分かっています。すぐ用意を」

立ち上がって去っていくルーを目で追いつていると、ふと鉄心はおお、と嬉しそうに声を上げた。

「百代にも伝えないとのお」

「——ッ」

百代。

その言葉に、その名前に、百八の脳内は真つ赤に汚染された。

声なき声。様々な想いと感情が頭の中で荒れ狂う。頭が爆ぜるような痛み、呻きながら蹲る。

それに気付いた鉄心は血相を変えた。

「ど、どうしたんじゃ百八!？」

「お——お願いが、あります」

「なんじゃッ!？」

「モモ——……彼女に会うのは、もう少し、待って下さい。一年……いえ、半年でもいいんです」

「な、何故じゃ? 昔はあれだけ懐いておったじゃろう? 百代もお前が病院からいなくなったと聞いた時、泣いておったんじゃぞッ?」

「お、ねがい、します。どうか、おねがい、します。時間、を。下さい。お願い、します」

「……………」

悲痛なお願い。否、懇願。頭を抱いて震えだすその姿は余りに痛

々しく、鉄心は百八を抱きしようとして　——直前、その目を見た。

目を見れば分かる。

それは武道において最も目立つ言葉だ。窮めれば窮めるほど読み合いの重要性が増していく。読みとるのは体の動き、重心などと数あるが、最たる読むべきは目だ。目は口ほどにものを言うというように、目は意志を語る。

武道を窮めた鉄心は、対峙した者の目を見れば何を考えているか、どう動くかを二手三手先、いやそれ以上先まで見とおす事が出来る。故に、見てしまった。

観えて、しまった。

この少年が、百八が抱える得体のしれない……闇を。

黒い瞳には——灼熱、血、怨嗟、悲鳴、嫉妬、死、死死死死死死死死の地獄。百七の骸が焼かれる灼熱地獄。

「——」

図らずしも、吞まれた。その黒過ぎる瞳に。

深すぎた、黒に。

一步下がってしまった。

「……分かった」

だから——そう、答えるしかなかった。

「ありがとうございます」

「ただし一つだけ教えてはくれぬか？」

「なにを、でしょう？」

「おぬしは今、何処をみている？」

震えが止まった、凍るように。

「……………」

「今、おぬしの目を見て、観た。地獄のような光景を。ぬしは、今ここにおるのか？」

「……………」

「あの時からぬしは」

「僕は——」

遮るようにして開いた言葉は、願うように。

「ここに——いたいです」

祈るように、手を組んで。

「炎は、消えない。消えない、んです。でも、僕は、前を、向きたくて。生きたくて。だから、ここにすれば、消えると、思ってた……」
「分かった」

鉄心はその震える子供の首筋を、とんと優しく叩いた。「あつ」と声を漏らして百八の意識は途切れた。

「すまぬ。詳しい事を知らぬ今のワシには、こうして眠らせることしか出来ぬ。せめて穏やかに眠っておくれ」

倒れた百八の頭に手を添える。手には微かな燐光——気だ。温かな気が百八に送り込まれ、乱れていた呼吸が整い、苦悶に満ちていた顔が次第に安らいで行く。

こちらに近づいて来るルーの気を感じ取り、鉄心は再び空を見た。

照り輝く太陽。それは天。天憧。その向こうに、懐かしき弟子の姿を見ようとして。

？これが私の天道なのです。切磋琢磨して成長する子供を見ているのが、私の楽しみなのです？

あの言葉を思い出して。

「生きておった。それだけでも、今は良しとしよう。のお十樹よ……」

1・・・挨拶（後書き）

今後の展開やヒロインなど、希望があつたら言ってくれ。

正直、ラストしか考えてないからそこまでの工程作ってないのよ

2・・・運命

目が覚めた。だが太陽はまだ上がっていないかった。

起きて目覚まし時計を確認——朝の四時だ。

全身にかいた汗を拭い着替える為、天懂百八は起き上って周囲を見渡した。

広い部屋である。

ここは鉄心が用意してくれた百八のための部屋……いや、アパートだった。

川神院ではない。

かつて、百代に会うのに時間が欲しいと頼んだが、同じ院内でそれは不可能だ。常人相手なら可能かもしれないが、半径数キロの気を識別できる彼女の事だ。どんなに隠してもいずれ見つけ出すだろう。

だからここは川神院ではない。そこからほどなく離れた山が近くにあるアパートだ。

ここに住み始めて早半年。季節は冬を過ぎ、春が芽吹こうとする2月の上旬。

あと二ヶ月も経てば、百八も晴れて川神学園に通う生徒になる——予定だ。

「学校かぁ……友達できるかなあ、きちんとやっていけるかそこはかとなく……いやかなり不安」

流暢な言葉。もうかつてのような区切り区切りの口調ではない。半年間、国語の教科書を音読した成果だ。

カラオケでも歌った。……一人カラオケだが。

ともかく、そうした努力もあってきちんと喋れるようになった百

八である。

「百姉え元気かな……、ッ」

チクリと刺す痛み在眉をしかめるが、かつてほどではない。遠目から彼女を見たこともあったが——後ろ姿ばかりで痛みもあったが——問題なかった。ただ昔あった時も化物染みていたが、今はそれ以上の怪物と化していた。五キロ離れた所から見ていたのに、どうして気付けるのか。顔がこちらを向く前に退散したが、アレは下手なホラー映画よりも心臓に悪い。

川神学園に通う生徒になる——予定。

予定は予定だ。決定ではない。

川神学園の学長でもある鉄心と体育教師のルー師範代はとうに決定と言う事にして入学費は当然。教科書やノート、鉛筆など学業に必要な物を全て揃えてくれたが、それでも予定なのだ。

予定を決定に変えられない最大の懸念——百代に会う事。

これが百八にとって如何ともし難い。

会って、出会って、なんて言えればいい？

こちらにも事情がある。鉄心の時のようにはいかない。下手したら全て終わる。

積み上げた五年が、全てなくしてしまうかもしれない。

そこら辺の事情は誰にも話していない。本当なら話さなければならぬのだが、それでも躊躇われる。

だからこれは自分でどうにかするしかない。

「……考えても始まらない。起きよつと」

パチンと電気を付ける。

照らされた部屋には——何もなかった。

教科書や体操着はあるが、それだけだ。

漫画やゲームは皆無で、衣服は制服と体操着一着。そして白い流し着が三着のみ。最低限のものしかない。というか、最低限のものもない。

例えば。

「……食糧、切れてる」

食べ物とか。

「買って来るか」

財布を手にし、百八は寒風に体を震わせて外へと繰り出した。運命の出会いがあるとも知らず。

テクテクテク。街を歩く。その都度百八は人の目を引いていた。白い髪、白い眼帯に白い流し着。

かつて変わらぬ姿は、更に積もった雪と合わさり、幻想的な光景を作りだしている。日も出ぬ空だ。暗い空が、白い世界と彼をより引き立たせる。

ただでさえ恰好からして目立つのに、加えて百八は美人だ。スラリとした肢体は細く、肌もきめ細かい。夏場は一枚の流し着で胸のふくらみがないので女の間違われる事は少ないが——それでも日に二、三回声を掛けられたが——重ね着している現在は強調する平らかな胸は隠れ、近くから見ても相当な美人に見えるだろう。

触れれば折れる、そんな花のように。
そして花には、

「ねえそこのお嬢さん」

「こんな時間にどおしたの？」

「寒くない？ 温めてあげようか？ 俺のナニで」

虫が寄る。甘ければ甘いほど、誘われるように虫が。特に最後の虫は最低とっていいだろう。セクハラなんてものじゃない。

振り返ればコートを着た三人の男。卑下た笑みを浮かべて立っている。

それに眉を顰め——る事もなく、百八は笑顔で答えた。

「おはようございます」

「——」

笑顔の挨拶に、三人は呆けた。

予想外の返しに、というのもあったが。

その笑顔が、あまりに綺麗で、純粹で、抱いていた邪念が一瞬にして削げ落ちたのだ。

「え、あ、はい。おはようございます——じゃなくて！」

「？」

「首を傾げるな——って、ああ、なんだこいつ、すげえそそるんだけど——」

再燃する邪念。ひゃっは——！ と叫ぶ獣共。

「ね、ねえねえお嬢さん、俺さ、美味しい飯や知ってるんだけど、どうかな？」

「それよりも俺ん家来いって！ 旨い飯たらふく食わせてやるから——！」

「栄養満点だぜ！……白くてちよつと苦いけど。ふほつ」

最低だ。最低だこいつら。特に最後の奴がもう終わっている。頭がピンクというかもはやどめ色だ。

逃げるんだ百八。断るんだ百八。ああけれど、人を疑わないのかこの男の娘は。手を引かれ、されるがままに付いて行く。

「僕おでん食べたい」

駄目？ と首を傾げる百八に、一人が突如打ちのめされたかのようにくらつき、ついで鼻を抑えた。

「ぐ……」

「ど、どうした？」

「ちょ、すまん。鼻血が……」

「僕っ娘キタコレー！」

「？　？　？　？　？」

連れて行かれる百八。ああ駄目だ。これはもう駄目だ。完全に信じているようだ。その顔にはなんの疑問もない。本人の頭の中ではすでにこの三人で鍋を囲っているところを想像しているらしい。鍋は食わせてもらえるかもしれないが、このままだと自分が食われる事に気付いていない。

男だと気付けばきつと無事に——という淡い願いはきつと叶わないだろう。

この容姿だ、ついていても知ったことかという事になりかねない。選択肢を間違えたのか、いやそもそも出ていないか。

このままではバットエンド直行。

シーンが一つ埋まる代わりに本作は早くも終了し、R - 18 専用掲示板に移行しなければならなくなるだろう。

作者としてもやぶさかではないが、そんな終わりは誰も認めない。
当然、彼女だって認めない。

「おい待て貴様ら」

声に、百八は鍋を食べる温かい想像が一瞬で消えた。凝固したと言ってもいい。足が凍り体が凍り、思考も心も凍った。

それは覚えのある声。それは懐かしい声。

夢に見るほどに、焦がれた人の声。

振り向けない。

振り向けば、どうなるか分からないから。

泣いてしまう？ きつと泣くだろう。無様の姿は見せたくない。

頭痛が走る？ それもある。遠目でも頭痛が酷いのだ。こんな至

近距離では気絶するかもしれない。

いやそもそも。

自分を、保つことさえ――……。

「んだよ、あー？」

「なにつてうわ！？ すげえ美人！」

「モノクロ美女お持ち帰りかい！？ おっもちかえりい………なのかいッ！？」

男達の声が頭に響く。

美人。男達がそういうのだから当然女性だ。

モノクロ。自分が白だから相手は黒だ。

そして覚えのある声。ああ間違いない。振り返らなくても分かる。そくだ覚えているぞこの気配。

「いやあ、たまには本能に従ってみるもんだな。こんな糞寒いどうしてか目が覚めて夜更けに街に出てみたら、綺麗な花に虫が集って

んだから」

「……は、なに、あんたやんの？」

「いいぜ、掛かってこいよ」

「屑木君と坐古君は空手と柔道の有段者なんだぜ！ 怪我する前に俺らと一緒にランデブーしようぜ！」

「ランデブーとか古臭い奴だな。おい、そこのお嬢ちゃん」

「——っ」

背中越しに声を掛けられて、思わずビクンと反応し、同時に百八は自分が女性に間違われていることに気が付いた。

「ちょっと離れてる。私がこの虫三匹ちよいと摘まんで捨てるから」
「いつてくれんじゃん、よお！」

雪を蹴る音。百八は振り返らないし動かない。どうなっているのかは分からないが、結果だけは分かる。

べしべしどかんどかん。

都合二度の打撃音。そして打撃とは思えない音が二度。

「そ、そんな屑木君と坐古君がつ！？」

「おいそこの芋虫。その屑君と雑魚君連れて大人しく土の中にもどれ。じゃないと」

パキリ、指を鳴らす小気味良い音。

きつと良い笑みを浮かべているんだろつなと苦笑と共に思い出し、ようやく体が自由になった。同時にこの場から去る。

「潰しちゃうぞ」

「さーせんしつたー！」

ぴゅーと逃げていく男。

「なんか最後のやついちいち台詞にネタいれてくるな、しかも古いやつ。ま、それよりも可愛い女の子は——っていない!？」

声の主である女性が振り向いた時には、可愛い女の子?は消えていた。

「はあ——はあ——はあ——」

何度か曲がり角を通り、後ろを振り返る。大丈夫、ついて来ていない。

良かった、と安堵の溜息を吐きだし、同時に無視していた頭痛に足がもたれた。

「あたっ」

ばしゃん。溶けた雪に顔面ダイヴ。鼻を打って服も濡れた。痛くて寒いが、おかげで頭痛も治まった。

「いつか会おうとは、思っていたけど……こないきなりはちょっとな」

全く心臓に悪い。これで振り向いたらもうどうなっていたか。なんて思っただしていると、途端目頭が熱くなっていた。

会いたくなかったのか。いいや違う、会いたかった。振り返って、名前を呼んでみたかった。でも無理だ。少なくとも、こんな様じゃ。今の……自分では。

「本当に……ままならないね」

自嘲気味に呟いた言葉に、

「全くだな」

答える声があつた。

「――」

再び凍る体。さっきの声、それも凄く近い。気配を探れば……なぜ気付かなかったのか。距離は一メートル。手を伸ばせば簡単に届く距離。

「お姉さん、離れるとはいったけど、逃げろなんて言っただけだなー。というか大丈夫か？ 転んだみたいだが寒いだろ。私のコートに入るか、ん？」

それは善意の言葉だ。肩に触れる手を咄嗟に払ってしまった。

「あ……」

声はどちらだ。払うと同時に振りむいた。

背中に立っていた彼女の姿が、限界まで開いた片目に映った。黒真珠のようにきめ細かい黒い髪と、勝気そうな赤い瞳。小さく開いた唇。

覚えている。覚えている。まだ何も知らなかった子供の時に一度だけあった少女、あの頃からきつと懂れていて惚れていた。きつと成長すればこんな美人になるんだろつと頭の中で描いていて、でも実際見てみれば想像よりも遥かに綺麗で。だから。ああだから。

「百姉え……」

言ってしまった。洩れてしまった。声が、想いが。胸に秘めていた想いを籠めて、万感籠めてその名前を。

同時に視界を焼き尽くす赤赤赤。血、慟哭、骸の丘に立つ誰か。灼熱の地獄。絶え間ない絶叫と身を焼き尽くす赤い色。

逃げる。本能が叫ぶ。

戻れ。理性が叫ぶ。

ここにいては、お前■ぬぞと叫んでいる。

「——ッ」

行動は速かった。凍っていた体は解凍され、全速力で後退する。早い。一流の武人の踏み込む速度に劣らない。だがそれは下策という他ない。

相手は川神百代。強者に飢える美女の野獣。

当然、そんな反応されれば追うに決まっている。

「……………」

筈——なの、だが。どういいうわけか、振り払われた手をそのまま

に、ぽかーんと口を開いてそこに立っていた。

我に帰った時にはもう遅い。逃げた白い人影はどこにもない。足跡も……見つからない。雪に残る跡を考えてか、白い影は雪の積もった地面ではなく建造物の壁を蹴り、屋上まで去って行った。

一足跳びで屋上に着地するが、影も形もない。気配で追おうにも範囲外なのか隠しているのか捉える事は叶わなかった。

「なんだっ たんだよ全く」

柳眉を寄せ、ん〜と言いながら先程の女の子（彼女の中では）を頭に思い浮かべる。

「かなりの美人だったな、可愛い系も混ざった。あと白い、真っ白だった。会った事は……ないな、うん。一度会えば忘れないぞ。それにあの三角蹴りからしての腕も相当だろうな」

うんうんと頷いて納得するが、しかし眉が寄るのは止まらない。

「じゃあなんで、この子は私のこと知ってたんだ？」

川神百代は有名人である。

武術界限ならば、その国の首相よりも。

だから相手から一方的に知っているのは別に珍しくもなんともない。彼女もきつとそうなのだろう。隣の県からわざわざ喧嘩を売りにくる奴だっているくらいだ。
でも。

——百姉え……——

悲痛な声と涙に濡れたあの表情。

あんな風に、あんな顔で、初対面の相手の名を呼ぶだろうか？
あんな、聞けば涙が出そうな声音で。

「いや、そういえば昔——つくしゅん！ ううう……」

思い出の底に埋もれていたセピア色の記憶。それがなんだったのか思い出そうとしたところで、くしゃみと寒さに震えだした。

「考えるのは後々。まあ、またどこかで会うだろうし。あーもう、ピーチジューズ買いに出ただけなのにどうしてこんな事になるんだよー」

ぶーたれながら百代は帰路へと足を向ける。

——百姉え……——

「……………」

足を止めずに振り返る。リフレインする言葉。

先程思い出そうとした記憶はもう見つからない。頭を捻っても見当たらない。

まあいい、どうせ明日には忘れているさ。

2・・・運命（後書き）

いきなり出会ってしまった百八と百代。

ちなみに百八君、かなり美人です。

何度もナンパされて、その都度引っかかり、ホテルに連れ込まれた事数限りなく。

でも大丈夫、貞操は無事です。

ファーストキスも無事です。

ボディータッチ（素肌）も守っています。

汚されてなんかいません。純白です。

いつか汚れるだろうがな。

3・・・夢現

天懂百八にとって、睡眠とは出来ることなら一生取りたくないものであった。

眠れば蘇る幼い記憶。それは優しい父と、自分を含めた107の血は繋がっていないけれど大事な家族。大好きだったたくさんの兄弟姉妹達。

笑っている笑っている。皆幸せそうに。

広い道場で全員が父の掛け声と共に構えて拳、蹴りを放つ。

稽古して、勝ち負けを決めて、結果に泣いたり怒ったり、拗ねたりブーイングしたり、ドタバタとしたけれど充実した日々。

ああでも、と。幼い自分を見ながら今の天懂百八は呟くのだ。

明晰夢。自分を自分と認識して見る夢の事だ。

百八はただ幸せだったかつての回想を第三者の視点で眺めている。その中に自分が含まれている事に軽い疑問を抱くが、やはりそんなものは夢だからでカタがつく。

この後、稽古が終ると同時に幸せのメッキは溶け落ちて、赤黒い正体を現す。

倒れ伏す107の家族。そして父。立ち竦む自分。それは赤。全てが焼かれる赤。全てが終わる終末の色。

そう、なる筈だった。

？お久しぶりです、お師匠様。息災ですか？？

？おぬしが抜けてちと寂しいが、なゝに問題ないわい？

あれ？ と予想していた地獄ではなく、現れたのは別の場面。

それは八歳の時。川神院の師範と師範代候補の二人と、もう一人、師範が連れてきた黒髪の綺麗な少女と出会った時の記憶だった。

地獄を回避した事に安堵し、同時に思う。なぜ、今回はこれなの

だ？

かつての記憶を夢で見る時、百八は必ず地獄を見て目が覚める。しかし今回は違う。こんな事は初めてだった。

？百八、挨拶しないさい？

人見知りする小さな自分を、苦笑しながら背を叩くのは線の細い、枯れ木のような男性。父だ。懐かしい、とは思わない。夢でいつも見ていたから。

だけど、あんな風に穏やかに笑う顔を見るのは久しぶりだった。

？百八、です。はじめ、まして？

もう少しちゃんと挨拶しようよ。そう自分に言ってしまいたくなくらいだどしくて弱々しい挨拶だった。それに比べて。

？私は百代だ！ よろしくな百八！ 私の名前に似ているくせにぜんぜん似てないな！？

彼女の挨拶は、なんと気持ちいい事か。

それから難しい話をし出した父と師範達から離れ、手を引かれて遊びに出た。ああして純粹に遊んだのは初めてだったかもしれない。いつも遊びとは、訓練を混ぜたものだったから。まあ途中稽古をしたが、才能のない自分には到底遊び相手が務まる筈もない。

退屈そうにしている彼女に言ったのだ。

？折り紙、しようよ？

今さらながらなんと女々しい趣味を持っていた男児だろうか。

百代は嫌そうに眉をしかめて「え〜」と口をへの字に曲げていたが、このままでも退屈だしと付き合ってくれたのだ。

？おいこら、キレーに折れないぞ。この折り紙ふりよーひんだ？
？そんな乱ぼうにしちゃダメだよ。ここはこう折って、こうやるんだ？

？……は？ おい待て百八。そこをどうやったらこんなになる。
とらんすふおーまーもビックリ変形だぞ？

？フツーに折っただけなんだけど？？

？ウソだっ！？

？ウソじゃないよ！？

なんて言いながら、結局彼女の折り紙は壊滅的で——そうだ、最後にふてくされた彼女に、折り紙を一枚折ってあげたんだけか。

緑と白とピンクの三枚の折り紙で作った桃の折り紙を。

僕が彼女に一つ。見よう見まねで彼女が僕に一つ。いっちゃ悪いが、凄いに細工な出来だった。

渡した後で自分の作品に不満があつたのか、やっぱり返せと襲い掛かってきたが、死守した。思えばあれが彼女に対する初めての勝利だったのかもしれない。

納得いかないと頬を膨らませながら、次は必ず上手く折ってやるかな！覚悟しておけよ！　なんて捨て台詞を釈迦堂さんに首根っこ掴まれた彼女に

？百姉え？

またね、と手を振って見送った。

彼女も拗ねながらも手を振ってくれた。

——結局、またなんて機会は燃え尽きてしまったけれど。

「ああ――」

声を出す。そろそろ覚める。何度も経験して分かるようになった感覚だ。

視界が全て白に染まる。

赤ではない。

白だ。

地獄ではない。

幸福だ。

本当に久しぶりに、良い夢を見ることができた。だから。

ほんの少しだけ、目を覚ますのが惜しくて……

目覚めは静かで、穏やかだった。
日が差したカーテンを見つめる事十分間。
ふと、なんの気なしに声が出た。

「……学園、行こうかな」

燃え尽きた思い出は戻らない。

だから、もう一度手を伸ばしてみたい。

そう思って、隅に置かれた学園関連の紙束へと手を伸ばした。

こうして物語は動き出す。

嵌る筈のなかった歪んだピースをねじ込んで。

本来ある筈だった青春物語は、緩やかに。

おかしな方へと、進み出して。

それでも今はただ。穏やかに。

3・・・夢現（後書き）

なんか暗いぜ。

次からは明るくなります。

みんな大好きマユマユと邂逅です。

ほのぼの出来るかは分からんがな！

4・・・入学式・上

春爛漫の桜吹雪。

四月。

川神学園。本日入学式。

本日は極めて快晴なり。本日は極めて快晴なり。

窓から差し込む陽光を浴びていた百八はいそいそと川神学園に行く準備を続けていた。

「えー……っと、服良し、髪よし、教科書よし、ノートよし、ハンカチとティッシュも持った」

必要な物を全てバックにつめこみ、玄関に向かうが、立ち止まりウターン。

「忘れ物、本当にないかな？」

そしていそいそとバックの中身を全て取り出して点呼。
天懂百八、これで38度目の鞆チェックである。

「あああ、どうしよう。大丈夫かな、これ本当に大丈夫かな？ 薬足りてる？ 忘れ物ない？ 着替えて必要なんだっけ。あ、蛍光ペン入ってなかった。ノートは……英語ノート必要？ 18行と15行どっちがいいんだろ？ やっぱり二つ……でもそれだとかさ張るし、たくさんもってつたら変な奴って思われそうだし」

本日は入学式。学年は2年。本来なら荷物など形だけで他は全く

要らないのだ。しかし学校と言った場所に無縁だったこの男はそれが分かっておらず、何度も何度も入念にチェックしていた。

そして確認する度、バックが膨らんでいき、現在はち切れんばかりに詰まっていた。耳を澄ませば聞こえて来るだろう。ミチミチという限界を迎える音が。

「――って、あああああ、そろそろ出ないと間に合わない……」

現在時刻が本当なら間に合わないが、この日の為に一時間ずらしていた事を忘れていた百八は更にあたふた。

何度も玄関とバックに目を向け、やがて意を決し玄関へと足を向けた。今度はもう立ち止まることもなく扉を開けて。

「……行つて来ます」

誰もいない住まいを振り返り、鞆を背負ってガチャンと締める。

天童百八。見た目は美少女、心は子供。現在気分は遠足に向かう子供であった。

「おお、桜道」

都会の整理された緑に改めて感動しながら百八は通学路を歩いていた。百八を見つめる視線は多々あったが、本人はそんなもの慣れたもので、気にもせず歩いていると。

だだだだだだっ!!!

と、後方からかなりの速度で走る影があった。当然百八は気付かず、走る影は前が見えていないのか、百八の背に衝突。

「？」

軽い衝撃に振り返る。そこにはぶつかった人物がこけ――

「後ろ回り受け」

――そうになっていたので、踵を返しその手を取って抱き寄せる。しかし鞆までには手が届かず、地面に転がって行ってしまった。

「大丈夫？」

「……………！?!?!?!?!」

抱いた人物――少女を引き離して様子を伺うが、目が錯乱したかのように動き回り、ぶるぶると高速で震動していた。口からは理解不能な言語が飛びだしており、まあ、ようするにだ。
テンパっていた。とんでもなく。

「あ、あわ、あああああああわわわ、あたし、わたし、すすすす」

「怪我ない？ 地面に付く前に手を引いたと思うんだけど、痛い所とかない？」

「な、ななななないです！ 大ジヨBUです！」

「………そう？」

言語機能が少なからず破綻していたが、見た所怪我もなく、本人もそう言うので手を放す。硬直している少女の近くに落ちていた鞆

と馬のストラップを拾い上げて渡した。

「これ鞆とストラップ」

「あ……あ、わ、は、い」

「もう落とした物はない？」

「は……はい！ わざわざ拾って頂きまことにありがとうございます
すっ！」

ギン！

効果音を付けるとそんな感じの眼光で少女に睨まれた。もしや抱きしめた事を怒っているのかなと首を傾げ、少女もその眼光のまま釣られるように首を傾げる。

「……………」

「……………」

今度は反対側に首を傾げると、少女も磁力で引かれるように首を傾げる。

勿論眼光は維持してである。

実に怖い。

何をやっているんだろうと百八は思い始めていたが、止める機会を逃してしまい、そのまま時間が過ぎていくと。

「おい、その見つめ合っているお二人さん」

声を掛けられた。

「はひゃい！？」

少女が悲鳴を上げて、百八も振り向くとそこには気だるそうな目をした男子。

制服からして川神院の生徒だ。腕には『入学式案内係』と書かれた腕章を吊るしている。

「えっと、今いいかな？　ずっとそのままだと色々俺も困るから声をかけさせてもらったんだけど」

「ももももちろんです！」

と少女。そしてハッ！　とやってしまったという顔をして百八に慌てて振り返る。

「いえ今のは別に貴方と見つめ合っているのが不快だったというわけではなくむしろどうお礼すればいいか悩んでいただけであってけっしてそんな失礼な事を考えていたわけでは……！！」

「あ、うん、うん。分かった。大丈夫だから、別にそんなこと考えてないから」

「ありがとうございます！　ありがとうございます！　ありがとうございます！」

「……………。あゝ、じゃあちょっといいかな、その一年生？　その手のものって刀？　サムライソード？」

「え？　あ、はい」

素直に頷く少女。なるほど手には紫色の竹刀袋が握られていた。

男子生徒はふーんと頷き、

「もしもしこちらポイント23。ええ、異常ありません。ええ、逆に退屈なぐらいですよ。では」

「？」

「はえ？」

「ちょっとごめん。定時報告してた。そしてその……」

と男子生徒が今度は百八に目を向ける。少し驚いたかのように目を開け、その手が引く物へと目を向けた。

「君も入学生？」

「うん？ うん、そんなところ」

「？ じゃあ、その手の荷物はなに？」

「これ？」

言われて、百八は荷物を前に持ってきた。

そしてガラガラとローラーが回る音。

旅行バックである。

鞆ではない。

旅行バックである。

鞆ではない。

パンパンである。

「旅行バックですけど？」

「いや、そんな疑問詞つけられても困るんだけど……なんでそんな鞆？」

「変ですか？」

「うん」

即答された。

その言葉に百八は多大なショックを受けた。

変と言われたのが胸に刺さったらしい。

今度は少女に目を向ける。縋るように。君だけはそんな事言わないよね？

そう瞳に想いを乗せて。

「……変？」

「え？ あ、あ……」

「……少し」

想いは届かなかったようだ。

ずーんと気落ちする百八に、少女はまたあたふたするが、男子生徒は気にせず質問。

「で、その鞆の中のとて、なに？」

「ただ荷物だけど……」

「入学式と同時に旅行でも行くの？」

「違うよ？」

「じゃあなんで旅行バック？」

「入りきらなかったから」

「……」

「……」

「……」

「……おおいまゆっちゅ、ここに猛者がいるぜ（ぼそつと）」

そんな問答が続いていると。

「いたいた、君。銃刀法違反って知ってる？」

「え？」

警官が来た。少女の手に握られた竹刀袋を確認し近づいて行く。

「さあ一緒に来てもらおうか。そして君は……」

警官の目が、今度は異常な量の荷物に向けられた。

何を言われるか悟った百八は、間髪いれず答えた。

「ただの荷物です（キリッ）」

「入学式にそんな荷物いらないだろう」

「……あれ？」

正論であつた。

「君もちよつと来なさい。危ないモノがないか確認させてもらつよ」

「え、でも入学式が……」

「いやね、私も本当はしたくないけど、入学式にその荷物をもってくる子は普通いないからねえ」

「なん……だと」

「というわけで君も来なさい」

「警察沙汰……」

「普通じゃない……」

ズーン。

少女と百八はブルーオーラを発しながら、警察に連行された。それを遠目で見送った男子生徒は、

「異常ありませんって報告は異常あるって事なのさ」

どこかキザつたらしく肩を竦め、再び別の方向へと歩き出した。

「問題なし。次からはもう少し肩の力抜いて行こうね」
「……ありがとうございます」

旅行バックの中身を点検していた時、警官の顔は引き攣っていた。なぜならバックの中には乾パンと乾燥米袋が一袋。2? ペットボトル三本と、他にも様々な物が多く入っていた。

警官は言った。君は被災地まで行くのかと。いい行きません。ただ必要だと思って入れたんです。そう返すと肩の力を抜けたように溜息を吐かれた。

「まあ、学業にせいを出すのは良い事だよ。頑張りなさい」
「はい」

ガラガラとローラーを引きずりながら警察署から外に出る。どうしてだろう、朝出かけの時よりも重く感じるのは。

ああこれってやっぱり変だったのか。そうだよ、普通入学式に乾パンとか着替えとかいらないよね。なにやってんだろ。僕。いきなり変な人扱いされちゃったよあははは。

なんて、思っただけで再び先程通った通学路に向かう。するとある程度進んだ先には、見覚えのある少女が立っていた。

「君さっきの」

「は、ははははい！ ささっ、さささっきのです！」

声をかけるとビクンと後ろで束ねられた髪が跳ね、高速で近づいてきた！

「に、にに荷物、そ、だ、だだ……」

「荷物？ あ、うん大丈夫。ただ量は減らそうねって言われたけど大丈夫だよ」

「そ、そうですか……」

「あれ？ でも君って僕が点検されている時に警官に連れて行かれなかった？ 報告とかなんとかで」

「あ、はい。報告してからもう一度ここまで来ました」

「……………」

その言葉にほうけた顔をする百八。それに少女はどう勘違いしたのか再び慌てだした。

「あ、あああああのもしかして迷惑でしたか？ す、すみません。私みたいなのに待たれていても迷惑ですよね、ほんとすみません！ すいません！」

「え？ ああいや違うよ。違うって。ただ待っていてくれたんだなっ。そういうの初めてだったからちよつと驚いちゃって」

ありがとう。笑って礼を言うと、少女のあたふたに＋赤面が追加された。効果は混乱の二重掛けである。

「へえ！？ あ、いえ……いえいえいえいえいえそんなお礼なんて」

ずずい。

「ありがとうございます！」

ギン！

また睨まれた。

「なんで睨むの？」

「え？」

名乗った少女に笑いかけた。

それがまた少女のテンパリ具合を加速させ、二人は成立しない会話をしながら通学路を歩いていく。

そんな見ようによってはピンク色の光景に、遠くで見ていた警官は。

「リア充爆発しろ」

ケツ、とか呟いたそう。

4・・・入学式・上（後書き）

誤字脱字、表現おかしいと思ったら感想に書いて下さい。訂正する
んで。

次回、一人称視点に挑戦。楽しみにしてね

5・・・入学式・中

ワシは今、始業式の準備に取り掛かっておった。といつてもやることなぞ署名を書いてハンコを押すだけじゃがのう。故に手が空いており、クラスを受け持つていないルーと談笑するのは自明の理じやろう。

それにルーとは話しておきたい事もいくつかあったしの。話しておきたいこととはもちろん百八のことじゃ。

なんでも出来るくせに妙に抜けておるから、きちんと学園に来れるか心配じゃわい。

「ルーよ、百八は始業式の時、寝坊せんかのう」

「学長。彼の場合、寝坊ではなく、準備に時間がかカルのではないかと」

「おお、そういわれればそうかもしれないな。最初は少し不安じゃったが、ああも嬉しそうな顔している所を見ると、遠足前の孫達を思い出すわい」

「えー全ク。最初の頃は人形のようにしたが、最近は随分と話すようになった。この前など一緒にブルース・ウィーの萌えよドラゴンを見たんですヨ」

……ジャツキー・チェンではないのじゃな。

「ちなみにジャツキーは全作品を二度見ました」

見過ぎじやろう。しかし、そうか。

「なるほどのお。では、何か興味を持ったか？」

「……いエ、楽しんでくれますが、どうも物欲が乏しいみたいです。

先日アパートに訪れましたが、昔と変わらず何もありませんでした」
「そうか……」

むうと唸る。

百八には趣味がない。なんでも出来る故かの。

勿論進めれば興味を持つてくれる、長続きせん。というか、途中で諦めてしまう。

飽きるのではなく、諦める。

興味はまだあるというのに、惜しむようにそれを離すのじゃ。

なにか、悪い事をしたというようにの……。

何故かは知らん。教えてはくれぬし。あやつにとって考えがあるのかもしれない。

……その考えが、分からのじゃがな。

「ところで、彼の頭痛はなんだったか解りましたか？」

頭痛。百八は、どういうわけかモモに関する話題を出すと頭痛がするという偏頭痛を持っておった。最近は眉を顰める程度で収まりつつあるようじゃが、最初の頃は酷いものじゃった。名前を聞いただけで痛みに震え、写真を見るだけで気絶するほどに。

それが精神的なものだというのは分からないでもない。しかしなぜ、モモがトリガーになるのが分からない。

聞いても頑なに答えず、ただ大丈夫ですの一点張り。

あやつについては何も分からん。

心を開いてはくれておる。しかし、開いた心の中で見せたくないものは絶対に見せてはくれぬ。

「……いいや。それでも学園に通うというからには、良い傾向なのじゃろう。ワシとしても、あの子とモモは仲良くしてもらいたいわい」

あやつはモモに並々ならぬ関心を持つておる。気絶するほどの痛みに耐えてモモに会おうとするくらいじゃからの。じゃが、その理由もやはり教えてはくれなかった。いや、一つだけ教えてくれたか？約束を守りたい。誓いを果たしたい？

そう言っておったな。モモと会わせたのは、十樹に会いに行った時の一度だけじゃ。恐らくあの時、何か約束をしたんじゃないかな。……嫁にもらうとかいうなら、大賛成なんじゃが。あの様子を見る限り、そんな甘酸っぱいものでもなさそうじゃないの。

「学長」

呼ばれ、顔を上げる。そこには紫色のスーツを来た女史、風間フアミリーが集まっておる2・Fの担任である小島先生が立っておった。

ううむ、いつ見ても良い体しておるの。

む、幾つか書類を持つておる。

署名とハンコじゃな。どれどれ。

ほれペッタンペッタン。

「ところで学長、今話していた人物は、もしや今日転校してくると言う天憧百八の事ですか？」

「うむ。気になるかの？」

「ええ、かなりの難度を持つ転入テストを全て満点で突破するなど前代未聞です。しかもどれも半分の時間も使わずに終えたと言うのだから尚更に」

「アレにはワシも驚いたのお……」

転入テストはいくつか難度がある。

その中でも一番難度が高いのが当然、S組転入テストじゃ。あれは五教科だけでなく、幾つか他の専攻分野を選択してやる筆記テストがある。

それを全て満点で突破するなど、普通はありえんじやろう。ワシも見て驚いてしまったわい。

しかし疑問が一つ浮かぶ。なぜあんな点数が出せるのか？イカサマをしていないのは知っておる、だが相当学ばなければ理解出来ぬ問題ばかりじゃ。

あやつに、そんな時間があつたとは到底思えぬ。行方不明になつてからずっと勉強に勤しんでいたとも思えぬし、あやつには謎が広がるばかりじやなあ。

「ワシとしては、F組に入ってもらいたかったのじやがな」

あそこは確かに騒がしく問題児ばかりじゃが、他のクラスにはない活力で満ちておる。百八は活力に乏しいからの、分けてもらえればこれ幸いと思つたのじやが……。

「学長、流石にそれは。学年トップの葵冬馬に並ぶ学力を持つ生徒を私のクラスに入れてしまえば問題が起こります」

そうなんじやよなあ。F組にS組の成績トップであるあの葵の倅が抜かれたなどという事になったら色々と問題じゃ。F組は更に調子に乗り、S組は激高するじやろう。最悪S組というシステムが崩壊しかねん。そうなる前に百八にはS組に行ってもらわねば問題はともじやないが解決せんじやろうし。

「ぬう、百八も手を抜けばいいのにお」

「学長……？」

「冗談じゃよお冗談」

おおう、小島先生の額が震えておるわ。怖いのお。しかし口ではああいったが、本音じゃ。あやつにS組のようなピリピリとした空気が合わんじやろう。

常にのんびり、のほほん、ぼけーとしておるからの。……む、そういうえばS組にも似たような気質の女子がおったな。それなら問題はないのかのお？

「うむ、終わったぞ」

「ありがとうございます。少し話が戻りますが、天懂百八と学長は知り合いで？」

「……まあ。聞きたいことでもあるのか？」

「ええ。出来れば話を伺いたいと思ひまして。今が忙しいと言つのなら、また後でも構いませんが」

ふむ、そうじゃな。あやつに理解者が多いのはワシにとっても都合がよいし、あやつにとってもプラスになるじやろう。

「今で構わんぞ」

「ではS組の宇佐美先生も連れてきます。私よりも知らねばならぬ立場でしょう」

「うむ」

くるりと踵を返して宇佐美の所に小島先生は向かいおった。むう、良いお尻しておる。

眺めておると小島先生が宇佐美を連れてきおった。心なしか嬉しそうじゃの宇佐美。ワシからは頑張れと言えんわ。

「学長、どうしたんで？ オレまだやらなきゃならない書類残っておるんですがね」

「すまんの、話したいのは今日転入してくる天憧百八の事じゃ」

「百八？ あゝあの馬鹿難易度の高い試験をオール満点でクリアした奴ですか。彼になにか問題でもあるんで？ 面接ときは随分大人しい子だとは思いましたか？」

「うむ。それで小島先生の口から言ってもらおうかの、聞きたい事があるとはなんのことじゃ？」

「彼の経歴についてです」

「……………」

「履歴書を見せてもらいましたが、彼は中学校どころか小学校も出ていません。更に半年前までは行方不明者扱い。ロクな記録がありません。学長自らの推薦だったのであの時は何も言いませんでしたが、教師としては少し、話を聞いておきたいのです」

「それは、百八の転入に反対……というわけではないのじゃな？」

「生徒は学ぶ事が基本です。反対する訳がありません。ただ、小中を飛ばして高というのは納得いきませんが……大本としては、知りたいだけです。彼がどういう人間なのか」

「なるほどのお」

流石小島先生、教師の鑑じゃ。宇佐美も流石小島先生ですねと太鼓持っておらんで教師の気概を見せい。じゃから袖にされ続けておるんじゃぞ。

しかし、知りたいだけか。それはそれで難しいのお。百八を語るにはあの事故が欠かせん。それに父親もの。

ルーに目をやると、コクリと頷く。うむ、ならば話さねばなるまいて。

「まず、あやつの父親の名じゃが、知っておるか？」

「いえ、知りません」

「ふむ、では一つヒントじゃ、あやつの姓はなんじゃ」

「天懂ですが……まさか、あの天懂十樹の実子ですか!？」

驚くのお小島先生。宇佐美は知っておったのか、それほどではないようじゃがの。相変わらず裏の情報には聡いのお。

「まさかあの聖人に子供がいたとは……」

「あやつはそんな風に呼ばれるのを嫌っておったわい」

「そうなのですか？　しかしその名に恥じぬ功績を彼は残しています。世界各地での救援活動を初め、自ら紛争地帯に乗り込んで平定すること三度。少なくとも彼のお陰で数千人以上の人間が救われています。更に孤児院や被災地域に億単位の金額を寄付したり、彼のした偉業を上げればキリがありません」

「あやつはただやりたいことをやっただけと言っておったがの」

「それ故に聖人などと言われたのでしょう。なるほど、天懂百八は彼の実子でしたか」

満足そうに頷く小島先生。ふむ、やけに熱が籠っておるの

「にしても十樹についてよく知っておるようじゃな」

「彼の姿勢は素晴らしいものでした。人を導くという点では誰よりも長けた偉人。私が心から尊敬する一人です」

「ならば当然、あの有名な事故は知っておるうな」

ワシのその言葉に、小島先生の眉が寄る。

「あの山火事ですか……。ですがあれは彼と彼が引き取った子供全員亡くなったと——なるほど、一人だけ生き残っていたと。それが天懂百八なのですね？」

「……そうじゃ、つい先日まで行方不明だったのは傷ついた心を癒

すために療養しておった。今ようやく復帰できるようになったのじや。見守ってくれるか？」

「もちろんです。前に進むために努力しているのなら教師として、支えないわけにはいきません。そうですね、宇佐美先生？」

「え？ ああ勿論ですよ小島先生」

「期待していますよ」

「任せて下さい！」

「学長、話を聞かせて下さってありがとうございます。では私は入学式の準備があるのでこれで」

「うむ」

さて、そろそろ始業式の時間じゃの。ワシもそろそろ腰を上げるとするか。

「すいませーん」

ん、男子生徒かの？ 何のようじゃと職員室の出入り口に立つ男子を見ると

「ぶほっ」

吹いてしまった。なぜおぬしがここにおる！ もしや……

「……百八」

「あれ、爺っ様？ っなんでそんな温かそうな目で僕を見るんですか？ いや、まあ春ですから……春だと視線って温かいのかな？

じゃあ冬だと寒いのか？ アレ？」

「今日は入学式じゃぞ？」

「？ ええ、ですから来たのですけど。ああそうでした、僕の所属するクラスがなかったんです。僕、もしかして来る時間を違えまし

たか？」

違うの？　と首を傾げられる。むう、こうしてみると本当に美少女じゃのお。

見た目という雰囲気といい。清楚というか純粹なんじゃよなあこやつ。モモが好きそうじゃわい。

これで男というから世の中おかしいわい。流石に男子生徒の服をきておるから分かるが、私服じゃと女にしか見えんからの。別に女物の服を着ておるわけでもないのに。

いつかブルマ穿かせてやろうかの……いや、ワシはなにを考えておるんじゃ？

見れば周りの先生も百八の言葉に呆けたような顔をしておるわい。

「あゝ、君が天懂君かい？」

む？　宇佐美先生が珍しくピシリとした背筋で百八に話しかけおった。小島先生が見ておるしの、良いとこ見せるチャンスじゃぞ。

「？　おじさんは？」

「おじッ！？　ん、コホン。オレは宇佐美巨人。君が転入するS組の担任だ」

「巨人？」

百八は宇佐美先生の上から下を見て、そして宇佐美先生の真上辺りの天上を見た。……なんとなくあやつが考えている事が分かるのお。あれがワザとじゃなくて素というのが、またなんとも……。

「今は小さいんですか？」

「……はい？」

「巨人なんでしょ？」

「いや、確かにオレは巨人だが」

「大きくならないんですか？ 巨人なのに？」

「……おおう、こういうヤツかよ」

宇佐美も理解したようじゃの。そうじゃよ、そういう奴なんじゃよ。

「えーっとな、俺は巨人って名前で、別に巨人族でもないんだよ」

「名前負けしてますね」

「おーう、オジサンもうダメかもわからんね」

爽やかに毒吐くのう。そんなつもりはないんじゃないだろうが。

「あゝそれとな、今日は入学式で、君は来なくて良かったんだよ」

「なぜですか？」

「入学式ってのは一年生がするものなの。で、君の学年は二年。二年と三年は始業式に来るものの、分かった」

「僕って学生一年生なんですけど、参加しちゃ駄目なんですか？」

百八が悲しそうに首を傾げる。……こやつ、女だったら無自覚で傾国の美女にでもなりそうじゃわい。

「……そりゃあ」

「……」

「……そ、そ、りゃあ」

「……」

「……学園長」

宇佐美から助けてという目をむけられてしまったわい。仕方ないの。まあ、何事も体験させてやりたいし、少し変わった入学式を体

験させてやろうかの。

「仕方ないのう。それでは」

「し、し、し、失礼します！」

む、なんじゃまた客か？ ん？ ほお、あの娘は……

「おぬし、黛十一段の娘じゃな？」

「はい！？ え、あ、はは、はははい！」

「楽にしてよいぞ。今のわしはただの学園長じゃからのお」

「爺っ様爺っ様。それだと余計緊張するから。あと由紀江は凄い人
見知りだから、これが素なんだよ」

「あ——天懂さんがいました！？」

「え？ いるに決まってるでしょ。僕ここの生徒なんだから」

「そ、そうですよね……」

なんか忙しい娘じやのう。

ふむ、しかし名前で呼ぶところを見ると……。

「おぬし、この娘と知り合いじゃったのか？」

「今朝、一緒に学園に来たんだよ。ね？」

「は、はは恐れながら！」

「ほら、可愛いでしょ？」

「~~~~ツ！？」

ぼんぽんと娘の頭を撫でる百八。

……人見知りの娘に、こういう場でそういう事を言つのはどうか
と思うんじやが。

天然とはかくも恐ろしいものなんじやのお。
見てみい、ゆで蛸みたいになっておるぞ。

「それで、黛のは何しに来たのじゃ？ 迷子……というわけでもなさそうじゃな」

「は、はい！ も、もも、もっ……天懂さんの、ですね！」

いちいち妙なアクセントをおくのうこの娘。

「由紀江、僕の名前まだ言えないの？」

「百八、まゆっちはなあ、一歩一歩着実に歩いていくタイプなんだぜえ。お前みたいに二段飛ばしで名前呼び捨てとか普通ねえよ、マジばねえよ」

……腹話術かの？

「じゃあ僕も黛って言ったほうがいいの？」

「いえ！ それはそのままでもいいです！」

「……由紀江がきちんと喋ったの初めて聞いた」

「まゆっちはなくやれば出来る子なんだぜえ」。惚れるなよあ

「惚れちゃ駄目なの？」

「~~~~ツ！？！？」

「お、おおう、その切り返しは中々だぜ。さすがのオイラも致命傷、将を射るならまず馬だぜー……ガクリ」

「松風が死んだ！？ 救急箱……いやこの場合工作箱か？」

「松風、松風え！」

……仲良いのおめし達。

「それで、夫婦漫才はおいとくしての……」

「夫婦漫才とかいつてくれるじゃねえかじーさんよ」

「松風が生き返った！？」

「オイラ八百万の化身だからな、あと七百九十九万九千九百九十
九の命があるんだぜえ」

「最強じゃないか松風」

「赤兎馬にだって負けないぜえ」

「渴ッ！」

「――」

「ふう、で。こやつがなんじゃったっけ？」

「あ……は、はい！ 天憧さんのクラスがないって聞いたので、そ
れを、そのえーと……」

「聞きに來たと」

「……はい」

「随分と好かれたのお」

「友達ですから」

「！」

こやつら見ておるとしよっぱいせんべい食べたくなるのじゃが……
…なんでかの。

「そもそもこやつは二年じゃぞ」

「……ほえ？」

「天憧百八は二年生。じゃから本当なら入学式に來る必要などなか
ったんじゃ」

「え、でも、実際に来て……」

「それはこやつのお勘違いじゃ。休みの日に学校があると思ってしま
うのと同じようなもんじゃな」

「え、じゃあ、百八さんって……先輩、なん、ですか？」

「そっだよ」

「……………」

む、黨が突然震えだしたぞい。

「あわわわわ、せ、せせせせんぱいに大して私はなななんてこと
を！」

「落ち着くんだまゆっち、オイラの聞いていた感じタメ口使っ
てないからギリセーフだ」

「いえ、私の心の中では同年代だと思っていましたからそれを差し
引いてギリギリアウトなのかもしれません……！」

「まゆっちは正直者だな、こんな良い子そういないぜ、なあ百八」

「そっだね、由紀江は可愛くて良い子だもんね」

「…………ツツ」

「やめるんだ百八あゝ！ このままだとまゆっちのMPが0になっ
て死んじゃうぜえ！」

こやつらもう本当にどっかで路上漫才でも始めてくれんかの。

「まあそういうわけじゃ。なに、せつかく百八も来たんじゃ、悪い
ようにはせんて」

笑うワシに、きよとんとする二人。ふおっふおっ、おぬしには入
学式三回分の経験をさせてやるわい。

5・・・入学式・中（後書き）

うん、なんかノッてノッたらこんなの出来た。
呼び方違つとか、キャラ違つとかう、なんかあつたら指摘お願い。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6249y/>

真剣で私に願いなさい - 八百万の想い -

2011年11月20日07時18分発行